

【書評】

伊達聖伸著
『もうひとつのライシテ——ケベックにおける
間文化主義と宗教的なものの行方』
岩波書店、2024年

梅川佳子
UMEKAWA Yoshiko

本書は、ケベックにおけるライシテと間文化主義を対象とする最も本格的な研究書である。この研究は、著者の長年の浩瀚な作業を基礎としている。そこで、この書評では、本書の内容に入る前に、本書と関連する著者のこれまでの著作三冊について簡単にふれることにする。

著者のフランス留学での5年間におよぶ研鑽によって完成した2007年の博士号取得論文に基づいた日本語書籍『ライシテ、道徳、宗教学——もうひとつの19世紀フランス宗教史』（伊達、2010）は、日本における、ライシテに関する最も信頼できる、長く待望されていた研究であった。この2010年の書籍は、近代の宗教理解にとって最も重要な課題のひとつを正面からとりあげた。しかも、その「宗教」は、単なる教会や教派団体、あるいは神学的教義や宗教学的古典の再解釈などにとどまらない。従来は世俗的なものとして理解されてきた科学や道徳、さらには教育制度にまで視野を拡げ、「宗教的なもの」という重要な概念を提起しており、この概念が、本書『もうひとつのライシテ』を読む鍵となっている。

さらに著者は、2018年に、わかりやすい『ライシテから読む現代フランス——政治と宗教のいま』（伊達、2018）を刊行するとともに、2020年には編著『ヨーロッパの世俗と宗教——近世から現代まで』（伊達、2020）を発表して、ヨーロッパの主要諸国における世俗と宗教の関係についての俯瞰的な書籍を、読者に提供した。

本書『もうひとつのライシテ』は、このような著者の実に長期的な研究の延長線上にある。まさに「宗教的なもの」やライシテの、ケベックにおける歴史の変遷が明らかにされる。著者によれば、ライシテとは、政治権力が「人びとの良心の自由や礼拝の自由を平等に保障する法的枠組」および「思想」と考えることができ、これは「時代や社会に応じてさまざまな形態を取る」

という。そこで、ケベックにおけるライシテが成立してくる「経緯を、宗教と世俗の歴史という文脈において再構成しよう」とするのが、本書の課題のひとつとされる。その際、本書では、ライシテや間文化主義の、主には理論的な面の議論と、教育や法廷などの実態の議論の、両面の議論がおこなわれている。実態の検証も重要でありきわめて興味深いのが、この書評では、実態分析の基礎になる理論的作業を主な対象とする。

本書の理論的内容について理解するために、評者は、まず「宗教的なもの」について、次に、異なる宗教を基礎とした様々な文化の間を調整する「間文化主義」について、最後に、その際もっとも重要な役割を果たす「ライシテ」について、順に論じる。

本書の重要な概念である「宗教的なもの」については、1960年代の「静かな革命」を契機とした変化が強調される。「静かな革命」以前は、「カトリック教会の影響力が非常に強」かったが、これが革命以降に変化する。その際、この変化を、著者は、単に教会の衰退の問題として理解するのではなく「宗教的なものの生成変化」として把握する。カトリック教会の影響力は、フランスの植民地であった17世紀初頭以来も、18世紀後半以降の「イギリス領ケベック植民地」時代においても、非常に強かったばかりでなく、1840年以降は「さらに強まった」とすら言える。ところが、この影響力が「静かな革命」によって大きく崩れ落ちるといふ。

著者によれば、ケベックでのカトリック教会の影響力は、1960年代以降、たしかに急速に減退する。しかし本書の独創的なメリットは、この問題を単に教会の衰退に単純化しないところにある。この現象は「ケベック社会を支えてきたカトリシズムの変容と新しい宗教的なものや宗教性の生成変化」の特徴の一つであるとされる。

「宗教的なもの」の生成変化を示す重要な例として、本書ではナショナリズムがあげられる。「静かな革命」以前は、フランス系カナダ人のナショナリズムは、エスニックであり、ケベックという領域性をこえていた。このときのナショナリズムを支える二要素がカトリックとフランス語であったとされる。

しかし「静かな革命」以降のナショナリズムでは、ケベックの領域性が強くなり、エスニックな性格が後退する。ところが領域性が強くなると、領域を越えて存在していたカトリックが後背に退き、ケベックの宗教に多元性が登場し、結局ライシテの概念が必要になったという。また二元的ナショナリ

ズムを支えていた一つの要素であるカトリックが弱くなると、残る他方の要素であったフランス語が宗教性を引き受けて「宗教的なもの」のひとつとなる。

他方で、困難に直面したカトリックの側は、伝統的な文化の中に生き残ろうとする。例えば教育においても、教会の権威的な知識を覚え込ませることから、子どもたちの日常生活の中でキリスト教の教えを発見させるように変化し、カトリックの「聖ヨハネ」の祭りも、宗教色をゆるやかに脱色し、コンサートや花火をとまなうものになり、ケベックの伝統文化として世俗社会への再埋め込みが行われたという。

ナショナリズムにおいて重要な役割を果たすことになるフランス語については、例えばサン＝レオナル地区における言語をめぐる紛争がとりあげられ、教育の現場で用いられる言語をバイリンガルにするか、それともフランス語単一にするかということについての対立が紹介される。同地区の教育委員会は1963年にバイリンガルの学校を開設するが、その後、教育言語はバイリンガルか、フランス語単一か、をめぐって市民間の対立が起きる。ケベック州政府は、このような紛争を解決するために1977年の法律で、子どもは、親が英語教育を受けている場合をのぞき、すべてフランス語学校に通うことにした。これによって、もともと英語系であった市民の教育の領域は認められ、この点で多文化は維持されたのだが、特にイタリア系移民を中心とする新移民の教育にはフランス語を使うこととなる。著者は、このような言語的対立の奥底にはプロテスタントイズムとカトリシズムの対立が埋め込まれているとしており、言語のもつ宗教性を指摘する。

このようなケベックにおけるフランス語およびフランス語を中心とする文化は、マイノリティの言語や文化とのあいだでどのような関係を結ぶべきだろうか。この問題について考える際に有効になるのが、「社会の統合と多様性の承認の両立をはかる間文化主義」の概念である。間文化主義の概念が登場した歴史的経緯を振り返れば、カナダ連邦が二言語多元主義を採用するのに対して、ケベックは、フランス系文化と新移民の文化を同列に扱われることに抵抗した。ケベックでは、フランス語をケベック州の唯一の公用語としたうえで、民族文化的なマイノリティに対しては十分な配慮や調整をしようとする。マイノリティの文化を尊重するとともに、マイノリティがフランス系の文化と積極的な関係を結ぶことを促進しようとした。

こうした方策は、アメリカのメルティング・ポットによる文化的一枚岩政

策とも違い、カナダ連邦政府の多文化主義による「カナダ的モザイク」とも異なる。フランス語を共通言語としながらもケベックのさまざまな文化共同体と「間文化的な対話」をしようとするものである。著者は、チャールズ・テイラーの議論を引用しながら、普遍主義的な政治はマイノリティ集団に抑圧として機能することがあると述べ、多様な諸文化の価値の平等性を認め、差異の承認が必要だとし、そのためには集団的価値の追求を個人の諸権利に優先させることもあるという。

このような間文化的な対話には宗教に関する対話も含まれており、これはライシテのひとつのかたちとなる。しかしライシテについて、普遍的な原理で定義するのではなく歴史や文化に根差して発見しようとする著者の方法からすると、ライシテは多くの議論や諸制度の中に、異なったものとして登場する。その際、著者はライシテの議論を「三つの立場」に整理する。第一が「完全なライシテ」を主張する「市民的共和主義者」であり、この人たちはフランスの共和主義のライシテをモデルとする。第二が、「カト＝ライシテ」の議論をする「保守的共和主義者」であり、文化的カトリックの永続性とライシテを組み合わせようとする立場である。第三が「開かれたライシテ」を採用する「リベラルな思想家」であり、この立場が「間文化的ライシテ」とも呼ばれ、ブシャール＝テイラー報告を典型としている。

著者は、現代では、「間文化的なライシテ」は「かすみゆく」と述べており、困難に直面していると考えている。2019年の法律で、権威ある公務員の勤務時間中における宗教的標章の着用が禁じられたが、これは実際にはムスリムの女性教員のヴェール着用を禁止するものであった。また、この法律は州議会の議長席の上にかかっていた十字架像を撤去してもよいと決めている。さらにこの法律は、前のブシャール＝テイラー報告と類似した用語を使っているとはいえ、その書き方では「優先順位が入れ替」わっているという。結局、ブシャール＝テイラー報告の「間文化主義的な開かれたライシテが後景化し、代わりに共和主義的な完全なライシテが前景化している」という。現在のケベックでは、ライシテがフランスの共和主義的なライシテに引っ張られ、「間文化主義的なライシテは伏流化を余儀なくされている」のである。

しかし著者は、現代ケベックにおいて「共生の理念としてのライシテを立て直す」ことが必要であると力説する。カトリックが圧倒的マジョリティであったケベックでは、「静かな革命」を境として多元的な社会に移行してくるなかで、さまざまな信仰が見られるようになり、承認の欲求も強くなってき

た。ライシテはそうした「多元性の調整の原理」である。例えば教育の現場においても「道徳の多元性を認め合う」ことが必要であり、「差異を封印しないライシテ」が必要であるとされている。「宗教をも含む多様な世界観をお互いに理解し合うことで個人が豊かになり、そうした個々人の集まりとして構成される社会を、ライシテの名において構想することも可能」だろうという。このような「間文化主義的ライシテ」については、著者も述べるように、ケベック社会に特有のものとして理解するよりも、「脱ケベック化するアイデアもあってよい」だろう。

評者が本書から学んだことのひとつは、日本も含めてどの国でも、文化的および宗教的な緊張や対立をかかえており、「間文化主義的ライシテ」は、ケベックを理解するうえにおいてのみならず、自らの国の問題を解決していくときに、きわめて有効なものになるだろうということである。本書は、単にカナダやケベックについて学ぶ場合のみならず、国家と宗教の関係について、あるいは異なる価値観をもつ者同士の建設的な関係の構築のために、不可欠のものになっているだろう。

(うめかわ よしこ 中部大学)

参考文献

- 伊達聖伸 (2010) 『ライシテ、道徳、宗教学——もうひとつの19世紀フランス宗教史』 勁草書房。
- 伊達聖伸 (2018) 『ライシテから読む現代フランス——政治と宗教のいま』 岩波書店。
- 伊達聖伸編 (2020) 『ヨーロッパの世俗と宗教——近世から現代まで』 勁草書房。